

【にんげん部門・最優秀賞】

夢を諦めない社会へ

金沢大学附属中学校 2年 杉本 賢太郎

「今日も顔を見せてくれて、ありがとう。」

診察室で、医師が優しく声をかける。医師の穏やかな笑顔が、曾祖母の表情を和らげてくれたのを、私は今でも覚えている。

その医師は、曾祖母の体だけでなく、心の痛みにも寄り添ってくれていた。診察という言葉に「優しさ」が加わると、こんなにも人を支えられるのだと、私はその時初めて知った。

私は小さい頃から、よく「将来の夢は何？」と聞かれてきた。宇宙飛行士、医者、研究者……。その答えは何度も変わったけれど、夢を見ることが当たり前で、それが生きる原動力になるのだと信じて疑わなかった。

しかし、年齢を重ねるにつれ、「現実的に考えなさい」「それは難しいかもね」という言葉が聞こえるようになった。夢はいつの間にか「持っていても苦しいもの」になっていった気がする。

でも、本当にそうだろうか。曾祖母は九十六歳を超えてもなお、「いつかまた、家の畑で野菜を育てたい」と話している。誰もが「もう高齢なのに」と思う中、本人はその希望を楽しそうに語っていた。夢は年齢とは関係ない。夢を見る心こそが、人を前向きにして、生きる力になるのではないか。

年齢は記号にすぎない。何歳でも、どんな立場でも、今日を楽しみ、明日を夢見ることはできるはずだ。だからこそ、私たちの社会には、そうした「夢」を支え合える土壌が必要だと感じている。

一人では叶えられない夢も、誰かの理解や支えがあれば、一歩ずつ近づけるかもしれない。高齢者も、若者も、互いに支え合い、学び合い、認め合える社会。私が目指すのは、そんな社会を築く一人になることだ。年齢で区切るのではなく、人と人とがつながり合い、夢を語るができる世界を、私は創りたい。